

これからのまき網漁業を考える
～次世代漁業者達の提言～

臼杵まき網青年部『ネクスト』
代表 山尾 和久

1. 地域の概要

臼杵市と津久見市は大分県南東部に位置しており、海岸線は、半島、岬、入り江や湾に富んだりアス式海岸を形成している。海域は豊後水道に面し、内海系水と黒潮系暖流との交流により、好漁場が形成され水産資源に恵まれている（図1）。

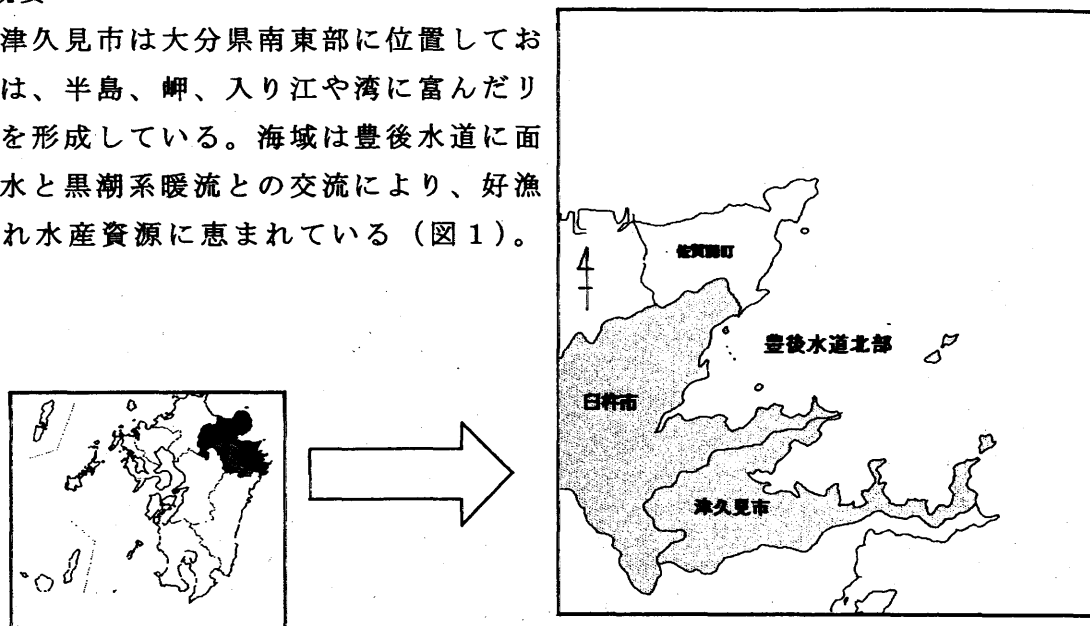


図1 位置図

2. 漁業の概要

私たちの所属する大分県漁協臼杵支店と津久見支店の平成13年度における総漁獲量は3,109トンで、そのうちまき網漁業は、1,090トンで35%を占めている（図2）。

アジ、サバを対象とした臼杵と津久見のまき網の漁場（図3）は、佐賀関も利用しているが、ほとんどが一本釣りで漁獲しており、まき網は営まれていない。

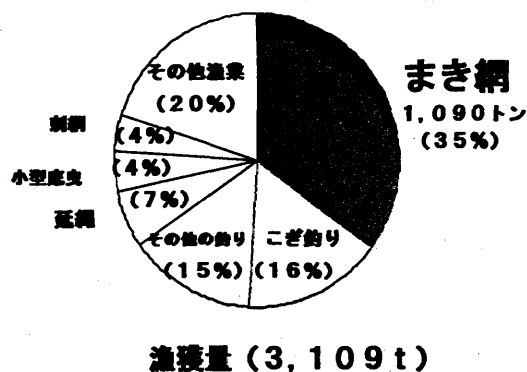


図2 臼杵支店及び津久見支店における漁獲量の割合(平成13年農林水統計資料)

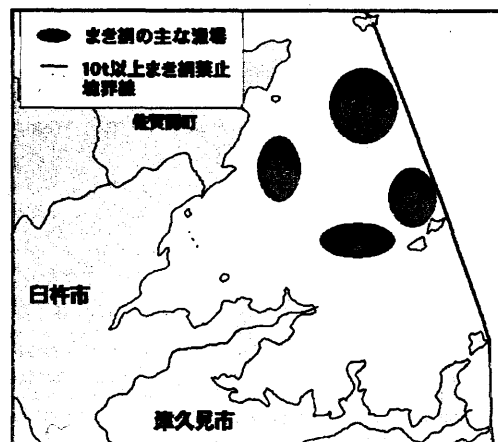


図3 臼杵と津久見のまき網漁業の漁場

操業は、年間を通じて営まれており、マアジ、マルアジ、マサバの最盛期は図のようになる(図4)。休漁日は、月に2度の大潮(旧暦の1~2日、15~17日)の5日間と、一斉休漁日である第2土曜日となっている(図5)。

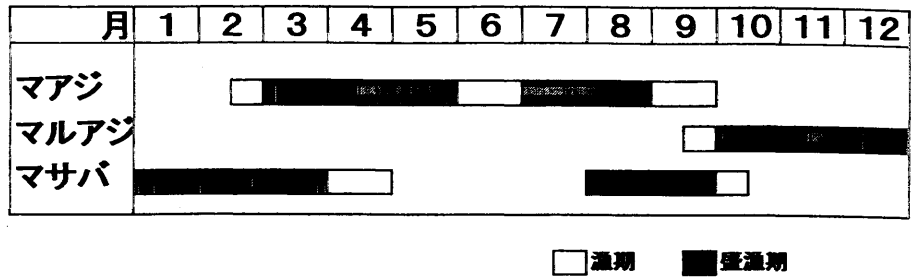


図4 主要魚種の盛漁期

一日の操業パターンは潮によって異なるが、最盛期には図のように、灯船の乗組員にとっては、一日のほとんどを船上で過ごすことになる(図6)。

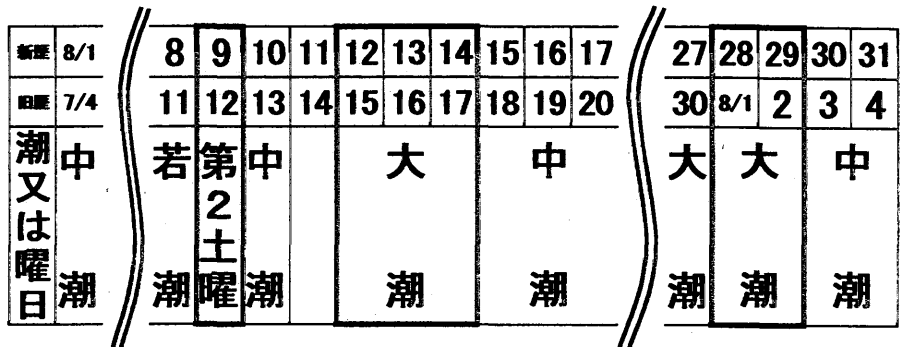


図5 平成15年8月の休漁日のパターン

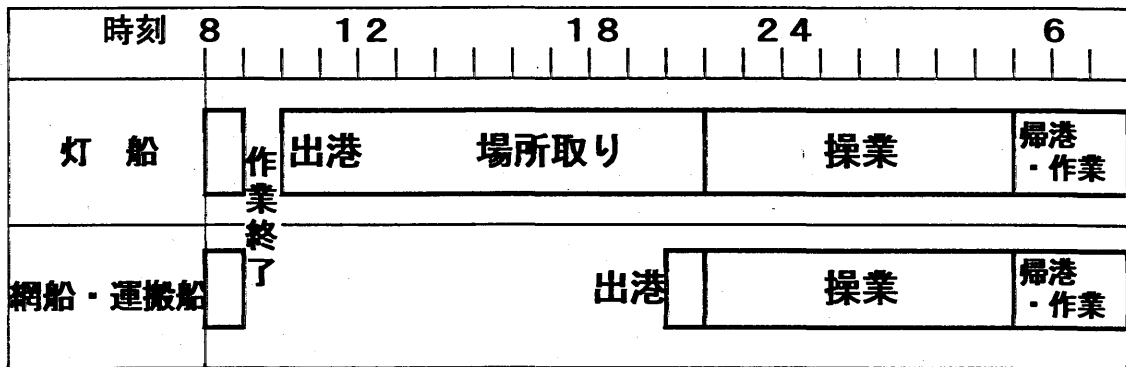


図6 灯船乗組員の1日の操業パターン

3. 研究グループの組織と運営

平成4年頃から地先でのイワシ資源が減少し、平成9年頃にはこれまで地先で操業していたまき網が、アジやサバを求めて沖合の漁場に集まるようになった。当然、漁場をめぐって場所取りが始まり、また、操業時に危険な状況が多く見られるようになった。こうした中、灯船の若い漁業者で、「操業について、もっと考えよう。」という話になった。そして、臼杵1ヶ統、津久見3ヶ統の合計4ヶ統から灯船の若手乗組員4名が集まり、交流会を始めた。この時のグループ名は、経営に携わっている若い漁業者の集まりなので、親方をもじって「子親方(こやかた)会」と名付けた。さらに、活動を重ねていくうちに、「漁労や経営のことで、親方を動かそう。」という意見が出始めた。そして、平成13年12月に、6ヶ統から11名が集まり「臼津まき網青年部『ネクスト』」を結成した。『ネクス

ト』とは「次世代」という意味合いを含めたものである。

4. 研究・実践活動課題選定の動機

昭和 61 年に、佐賀関の一本釣りとの間で、漁場をめくり、裁判にまで発展するというトラブルがあった。これは、臼杵と津久見のまき網漁船が操業中、佐賀関の一本釣り漁船がそれを取り囲み、漁獲した魚を海に放流させたというものである。この裁判は、民事、刑事双方で争われ、和解に至るまでに数年を要した。このようなトラブルは依然として起こっており、それを解消するためには何かをしなければならないと考えるようになった。そこで私たちは、漁業の基本となる「漁業制度」や、佐賀関との共存のために「資源管理」について勉強していくことにした。さらに、操業のあり方などについての私たちの考えを親方に提言していこうということになった(図 7)。

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1)平成 13 年 12 月

前述したとおり、初年度は漁業制度や漁業調整規則について学んだ。法的には、操業区域であっても、つき磯漁業権内では操業できないが、共同漁業権内では操業できるということ、まき網は灯船が灯をともしたら操業開始とみなされることなど、疑問、誤解を解くことが出来た。

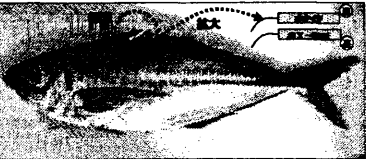
(2)平成 14 年 6 月

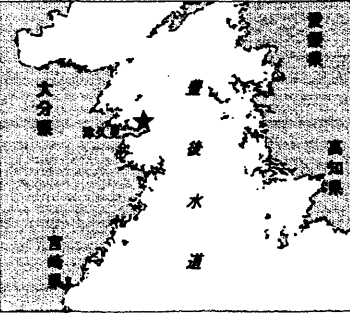
漁獲物運搬用のチョウチンカゴの形状や、漁海況予報についての勉強をした。チョウチンカゴについては、もっと魚を効率よく運ぶためには、どのような材質や形が良いのか話し合った。このことについては今後も話し合い、良いカゴがあれば試験的に使ってみたい。また、この学習会が「マアジ回遊調査のための標識放流」につながり、平成 15 年 3 月から 4 月にかけて津久見市四浦で、私たちが漁獲したマアジで標識放流を行った(図 8)。



図 7 漁場をめぐるトラブルを報じる新聞 (大分合同新聞)

海洋水産研究センターが行ったマアジ標識放流調査





放流日 放流場所 放流尾数 大きさ 判別方法	平成15年4月28日 大分県津久見市深良津地先 1,600尾 平均尾又長25cm 黄色のスバゲティータグを装着 (お付け 01-0001~漁獲の番号を印刷)
------------------------------------	---

提供:海洋水産研究センター

図 8 マアジ放流調査

(3)平成 15 年 6 月

14 年度の学習会で、網なり実験水槽の話題が出た。早速どこにあるか調べ、視察研修に行くこととなった。視察場所は、山口県下関市の西日本ニチモウ株式会社で、大型水槽で実験を行い、作業の際の網なりはどうなっているのか実際に目で確認した（写真 1）。

(4)平成 15 年 9 月

視察の際、試験の様子をビデオに撮影しておいたので、反省会を開催し、網なりの様子を再度確認した（写真 2）。海水中の網の動きを理解することができたという意見が多くあり、網を入れる際に、潮の流れや速さで網なりのイメージがわくようになった。このことにより、効率的な作業が出来るようになった。また、マアジの標識放流調査についての勉強もした。この調査で、南郡のまき網で獲れるマアジは沖合回遊群であるが、北郡のマアジは瀬付き群を主体としていることが分かり、資源管理の重要性を再認識した。

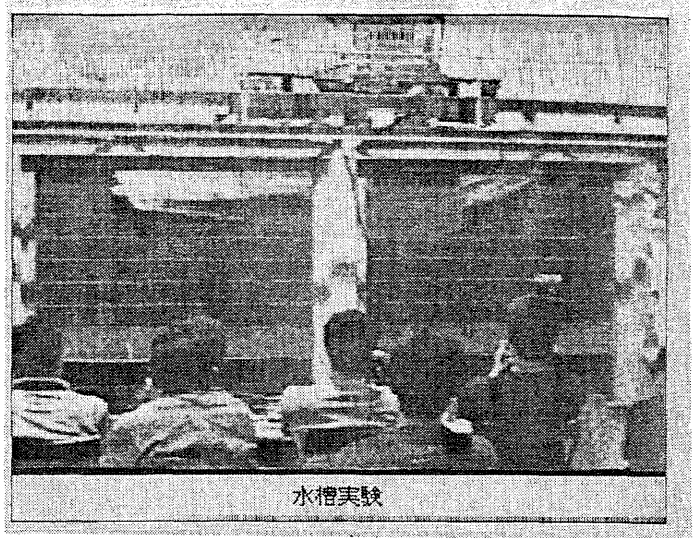


写真 1 網なり水槽実験



写真 2 反省会

6 波及効果

(1)灯船の出港時間の取り決め

最盛期の灯船の乗組員は、家で寝る時間がほとんどなく、体力的に非常に苦しい状況に追い込まれていた。また、早い時間から場所取りをしていたので、一本釣りの作業の邪魔になっており、私たちもこういうことは、極力避けたいとの強い気持ちを持っていた。そこで、親方達へ、出港時間を決めて各網順番で出るようにして欲しいと提言した。この提言は、津久見市まき網協議会に持ち込まれ、平成 15 年 3 月から、灯船の出港時間を午後 4 時に固定し、各網順番で行うこと、灯船の間隔を 200 メートル以上空けることが決まった。

(2)臼津まき網協議会の発足

私たちの提言を親方達が話し合う際、同じ漁場を使うすべてのまき網がそろって話をする必要がある。これも、津久見市まき網協議会で議論された。そして、平成 16 年 1 月から、臼杵の全ての親方が加わり、名称を「臼津まき網協議会」と変更し、親方達も臼杵と津久見で連携していくこととなった。

7. 今後の課題や計画と問題点

(1)休漁日の追加

私たちの漁獲しているアジは、瀬付きアジが主体ということなので、資源管理はさらに

重要であり、休みを増やすことで、漁獲圧を少しでも下げる必要がある。また、まき網の乗組員は若い漁業者が多い。今の体制では、大潮が平日になると休みが平日になるし、第2土曜の休漁日もイベントが入ってしまうことが多く、結局、子供と遊ぶ時間がなくなってしまふ。そこで、第3土曜日を休漁日とすることで、家族をもっと大切にできると思う。

(2) 他漁業との交流

依然として佐賀関の釣り漁業とは摩擦が起こっている。しかし、私たちの代では、それを終わりにして、共存を目指していきたい。昨年度には、臼杵と津久見の青年部の協議会が発足し、いろいろなイベントで交流している。佐賀関でも、青年部結成への動きがあると聞いているので、再結成後は、この交流会に参加してほしいと思う。

(3) これからの夢

私たちの夢は、大分県全域のまき網漁業者が参加する、大分県まき網漁業協議会が発足されることである。これからは県全体のまき網漁業者どうしで将来について話し合い、活動していく必要があるからだ。もしそうなった時には、私たち『ネクスト』が、リーダーシップをとっていきたいと考えている。これからも、いろいろな勉強をし、視野を広げていき「夢」に向かって前進していきたい。